■ レポート4

女子短期大学の学生相談における兼任カウンセラーの工夫と留意点に関する試論

－「日常と非日常の重なり」と女性の「共に抱え，共に育む」関係を中心に－

楠 本 和 彦（南山短期大学助教授）

Ⅰ．日常と非日常の重なり

楠本（1999）に示したように，小規模の短期大学においては，学生相談における理想的な環境を用意することは困難である。その場でよりよい学生相談を行なうためには，小規模の短期大学における兼任カウンセラーとしての特徴と限界を知りつつ，その場にあった独自の学生相談を展開するための工夫や留意点があると思われる。

兼任カウンセラーによるカウンセリングが，一般的な場におけるカウンセリングともっとも異なる点は，カウンセラーとクライエントが日常においても非日常においても接点をもっている点である。この点に関してそのメリット，デメリットについて，いくつかの先行研究がある。鳴澤（1986）は兼任カウンセラーは「個々の学生の対応に追われがちで，学生相談活動全般にじっくりとり組むことはほとんど困難である」とし，学生の身分の決定権を持ち，評価を行う者であるなど「社会的絆が望ましいカウンセリング関係の樹立に陰に陽につきまとい，関係を深めることをむずかしく」すると言う。田嶌（1992）は学生相談を大学教育の一環と位置づけ，その特徴の一つとして日常の生活の場を共有していることを挙げ，ネットワークアレンジの重要性やカウンセラーが生身を曝すことのメリットを指摘している。児玉（1992）は同じ座談会の中で，学生相談のカウンセラーのネットワーカー的役割の意義を認めると同時に，クライエントのプライバシー保護の面からカウンセラーと教師との役割意識を持つことの必要性を説いている。倉戸（1996）は兼任カウンセラーのプラス面として，「リエイゾン機能が発揮できる，学生を広い視野から見られる，大学を離れても教員として，関われる」ことを挙げ，マイナス面として，転移を受けや

すく，逆転移を起こしやすいこと，燃え尽きやすいなどを挙げ，カウンセラーの力量が大きく問われることを留意せねばならないとする。

以上のように，日常と非日常の重なりに関して，肯定的見解，否定的見解がある。これは，兼任カウンセラーは，専任のカウンセラーによる学生相談に比べ，その広がりにおいて困難や限界を持つことを表していると考えられる。兼任カウンセラーのマイナス面を最小限にとどめ，プラス面を生かしていくには，カウンセラーが依拠するパラダイム，学生相談観の検討，カウンセラーの力量の向上，兼任カウンセラーとしての工夫が必要であることをも示している。

兼任カウンセラーが行うカウセリングには必然的に外界や「錯覚」(Winnicott, 1971) が持ち込まれる。兼任カウンセラーが学生相談を行なう場合，フロイトのいう「かくれ身」を保つことは不可能といってよい。カウンセラーが日常の流入をできるだけ防ぎ，守ることによって，非日常としてのカウセリングの場，内的変容の場を確保すべきであるとの考えが成り立つのは理解できる。カウセリングが「自由で保護された」(Kalff, 1966)，内的変容の場になることは，筆者も大切にしたい。だが，兼任カウンセラーのカウンセリング場面が日常の流入に曝されやすく，それは日常から守られた理想的なカウセリング場面に比して，本来的に質の落ちる場であると考えることが，はたして，そのような現場で生きる兼任カウンセラーにとって，建設的なスタンスなのだろうか。自由で保護された，内的変容の場であることと，外界の流入を許さないことは同義なのだろうか。

日常が流入することで，それでなくても複雑な心的現象をより複雑にすることは間違いがない。カウンセリング場面を複雑怪奇なものにする危険性をもつ。カウンセラーは現実という要因をも視野に入れねばならなくなり，取り扱わねばならない要因がさらに一つ増える。自分が関わることが可能なケースなのか，適切なのか見極める力がさらに要求される。特に自我レベルが高くないクライエントに対する配慮はより必要となる。カウンセリング場面で起こることに対して，クライエントの内的な要因だけでなく，カウンセラー側の要因と，両者の相互関係に対する配慮とそれを取り扱う技量が要求される。クライエントの内界で起こっていること，カウンセラーの内界で起こっていること，カウンセリングの場で起こっていること，外界で起こっていることの繋がりの有無やその関係を見る力も要求される。また，転移的状況にカウンセラーはさらに厳しく曝されることになる。

上記のような困難を持ちつつも，敢えて兼任カウンセラーとしてカウンセリングを行なうのであれば，兼任カウンセラーのメリット，デメリットを理解しつつ，新たな工夫を創造し，実践を行なうことが不可欠になる。そのような認識と工夫により，カウンセリングの場は，自由で保護された空間となり，クラ

イエントは創造的に生きることが保証される。本稿では，女子短大生対象の学生相談を兼任カウンセラーが行う際に留意しなければならない点として，「(錯覚⇔脱錯覚）⇒よりリアルで，トータルな人間関係」，「女性のオープンシステム」，「共に抱え，共に育む」関係の観点から考察を行なう。

Ⅱ．（錯覚⇔脱錯覚）⇒よりリアルで，トータルな人間関係

日頃，授業をしていて，教師は「錯覚」の海の中で泳いでいるようなものだと思うことが少なくない。講義後，感想を学生から提出してもらい，自分の言ったことがかなり違って受けとめられていることに愕然とすることがある。しかし，その誤解は講義と全く関係ないものではなく，多義性に富んだテーマの一部だけを捉えたものであったり，「逆は必ずしも偽ならず」という時に，自分の考え，感覚をあたかも教師が言ったように捉えているような場合である。また，学生が教師のイメージを語る時，誤解や一部の誇張を含みつつ，その教師の特徴を確かに言い当てていると感じるときもある。これらの事象に出会うと，教師という存在は学生の様々な投影と教師自身の実際・現実が重なったところで生きていて，そこから逃れることはたやすくないと思わざるをえない。実像と認知のギャップが起こっている時に，学生の無意識的幻想がそのまま投影されているという場合は，日常のキャンパスにおいてはそう多くない。教師としての筆者はそのような錯覚を自分が楽しめたり，「まあ，しかたないかー」と思えたりして錯覚を遊べ，自己イメージと学生の認知のギャップを抱えておける間は，そのままにしている。しかし，学生相談室での関わりにおいては，より慎重で，的確な配慮が必要になる。

兼任カウンセラーの場合，そのような錯覚がたやすくカウンセリングルームに持ち込まれる。むしろ，そこから始まる。

すると，兼任カウンセラーが転移的な状況に遭遇した場合，それをクライエントの内的対象の投影によるものと解し，取り扱うことだけで充分なのかという問題が生まれてくる。これは一口には述べられない。カウンセラーの自己イメージとクライエントの認知のギャップがクライエントの錯覚－幻想の軸においてどのあたりに位置するのかは，様々な要因の影響をこうむる。一つには自我レベルの問題がある。また，心が層構造を持つのであれば，同一個人においても，今話題になっていることがどのレベルから発しているのかも関係する。現実に外的現実と内的現実とがあると言われるが，その区別が判然としない領域も存在する。実際にはそれらの様々なことが複雑に絡み合うところで，兼任カウンセラーの学生相談は行われている。

以下に筆者の学生相談の一例として，学生が話した一つの夢とその時の気持ちの記述，そして，それについてのカウンセラー，クライエントのやりとりを示す。

［クライエントの記述］

〔夢〕

南短の食堂に南短の同級生ＡさんとＢさんが座っていて，そのテーブルに両手をついて話をしている楠本先生がいる。

先生が私のカウンセリングの内容を二人に話しているところだった。私はそばで立ちつくし，大泣きで「なぜ，カウセリングの内容を先生は，話しているの？」と何度も言いながら，泣いている。

泣きながら，抗議している私。ＡさんとＢさんと楠本先生は笑みを浮かべてこっち（私）を見ている。

〔夢を見ていた時の気持ち〕

すごく，せつなくて，のどが苦しくて，どうして！！どうして！！どうして！先生，話してるの？という感じ。

話すはずがない楠本先生が話している。信じられない感じ。でも話をしている楠本先生に裏切られたような感じ。私がこんなに怒ってて，くやしいのにどうしてみんな笑ってるの？笑ってる顔を見て，又，泣ける。

〔起きた時の私の様子〕

ほんとに泣いてた自分のしゃくりあげで起きた。喉がつまってる感じがする。汗ビッショリだった。

［カウンセリング場面］

カウンセリング場面でのやりとりやクライエントの様子，カウンセラーが思っていたことを記す。クライエントの発言は「　」で，カウンセラーの発言は＜　＞で，カウンセラーが思っていたことは，｛　｝で示す。

クライエントは最初に，「○○ちゃん（学生に呼ばれているカウンセラーのあだ名）を信頼しているつもりなのに，まだ無意識のなかで信頼できていないのかと思った。悲しくて不安で…最初は不安があったけど，このごろはなくなって来ていたと思っていたのに」と話す。カウンセラーは相づちをうって聴いている。｛確かにこの夢の大きなテーマの一つは信頼。それは，カウンセラーとクライエントとの信頼でもあるし，クライエントの人に対する信頼のテーマでもある｝。クライエントは喉が熱くなってくる。｛この現象はカウンセリングの中で，時々起こる。以前，喉のその感じを感じてみる，味わってみることを促したことがあったが，その時は感じがつかめなかった。まだ時が満ちていないのだと思い，カウンセラーはそれ以後は促すことをしていない。この時も迷ったが，やめる｝。クライエントはしばらくだまっている。＜夢のことで，何か思い浮かぶことはある？＞と尋ねるが，「わか

らない」と言う。{信頼感について掘り下げることもできるが，今すぐは難しい感じがする}。

＜実際にここでの話を僕が外に漏らしている不安はある？＞と問うと，「それは全くない」と言う。しばらくして，＜この夢は僕が，ここと外を重ねているということでもあるんだけど，ここでのことと外でのこととで，何か感じることは？＞と言うと，しばらくして，「カウンセリングが始まる前は，よく個人研究室に行っていたのに，最近は行かない。行けない自分がいる。(間) 忙しそうにしている姿を見ていると，これ以上話に行くのは迷惑かなと思ってしまう」＜確かにいつもばたばたしてるから，そう思って無理ないよな＞「たまに外でいた時に，自分が（カウンセラーの）視界に入っているのかと思うことがある」＜そうやろな。忙しくしていて，実際に気づいてないこともあると思う。(間) それだけじゃなくて，普段の休み時間とかでは，僕は話しかけられたら話すけど，自分からみんなに話しかけていくことって，少ない方だと思う。あいさつは自分からもするけど。そんなことがあるから，そんな風に思わせてしまうところもあるやろな＞（間）「言われてみれば…あー，そうなんだ」＜ここでのことも，外でのことも大事にしようとは思ってるけど。今は，これが僕の限界かな。＞（間）「なんか。すっきりした。(間) さみしい時とかもあって。忘れられてるんじゃないか。私だけがわざわざ，避けられているのかと思ってたけど，そうじゃなかった。(間) この夢を見た時，なんか信用してるようで，実は信用してなかったのかなって思った。(間) 私にとって，やっぱり親とのこととかもあって，信頼することって，簡単じゃない」。続いて，親子関係の中でのうらぎられた感じや見捨てられ感を話していく。

カウンセリングの流れをふりかえる。夢に関してクライエントは最初にカウンセラーへの信頼感の問題に触れようとする。すると，喉が熱くなる身体症状がでてくる。その症状はクライエントの信頼感に関する問題やそれまつわるクライエントの思いに関係があることは，これまでのカウンセリングの中で徐々に分かってきてはいるが，まだきちんと取り扱えていない部分である。カウンセラーの力量の問題もあろうが，クライエントがこの身体症状に面と向かう時がまだ満ちていない感がカウンセラーにはする。夢の連想が出てこない。カウンセラーは日常と非日常の重なりの要因を取り上げる。現実場面にまつわるクライエントのカウンセラーに対する思いが語られる。カウンセラーはその点に関する自分の状況や思いをオープンにする。クライエントはある部分で，すっきりし，カウンセラーへの思いを語り，続いて夢の中での感情に触れ，信頼のテーマに戻り，親子関係でのうらぎられ体験や見捨てられ感に話は展開していく。

夢は多層的，多義的である。この夢も様々な意味を持ち，様々な角度から取り扱うことができよう。例えば，うらぎられる恐怖，見捨てられ感などの信頼に関するテーマ，カウンセラー－クライエント関係，友人関係などのテーマが

考えられる。信頼に関しては，このクライエントの場合，生育史のなかで，親子関係における見捨てられを経験しているため，非常に大きなテーマとなる。それは当然，カウンセラー－クライエント関係，友人関係にも反映される。また，カウンセラーのパーソナリティの要因もあろう。

この夢やクライエントの言葉をクライエントの内的な対象関係の問題と捉えたり，その投影としての転移，そして逆転移の問題，内的対象関係の対人関係への影響と捉えることは必要である。「そうであるのに，カウンセラーの関わりは必要以上に自己を曝し，カウンセリング場面に現実という不純物を持ち込み，クライエントが自己の内界を探る作業を阻害している。カウンセリングの基本の基本，大原則を踏みにじっている」との批判があろう。そのことを知りつつも，このやりとりを記したのは，兼任カウンセラーが学生相談を行う際の，日常と非日常の重なりの問題とそれに関する工夫について考えたいためである。

今回の夢の取り扱いでは，上記の夢の要素を網羅してはいない。クライエントが信頼について取り上げようとしてまだ触れきれず，連想も出ない時に，カウンセラーはそこを深めることをせず，日常と非日常の重なりのテーマを取り上げている。このような判断を行なったのはこの夢は確かにいくつかの重要な要素を持つが，カウンセラー－クライエント関係がメインテーマであり，そして夢のモチーフからカウンセラーの現実の姿が影響していると考えたためである。日常と非日常とが重なる兼任カウンセラーのカウンセリングの場合，カウンセラーの日常に関して取り上げることにも，カウンセラーがオープンになる必要があると筆者は考える。クライエントの側面のみを取り上げることは一部のみに焦点をあてることであり，クライエントに必要以上の負荷をかけることになる。カウンセラーの日常を取り上げると言っても，それはもちろんカウンセラーのプライバシーを暴露することではない。日頃見せている側面がカウンセリング場面に影響している時，カウンセラーは自分の要因に関して，防衛的にならないことが必要なのである。転移的状況において，カウンセラーの外的現実の要因が影響している時には，クライエントの内的要因を深める準備として，カウンセラーの外的現実の要因を取り上げることが必要な時がある。クライエントが自分の力で自分の要素を自発的に取り上げている時は，その流れを大切にするのはもちろんである。しかし，クライエントが自分の要素を取り扱いかねている時には，クライエントのより深い面に焦点をあてる関わりをカウンセラーが行う前に，カウンセラー側の外的現実の要因を取り扱うことが必要になる。その要因が両者の間で，納得のいくものとなってから，クライエントの要因に帰っていくことが，日常と非日常を共にする場合には自然な流れなのではないだろうか。転移的な感情を表明し，取り上げることはクライエントにとって，大変負荷のかかることである。日常と非日常を共にするクライエントの場合，その負荷はさらに大きい。そのためには，それにふさわしい環境を整えることが必要になる。そのような環境の中で，クライエントは怖さを乗り越

え，自分の転移的感情やその根にある自分の要素に直面できると考える。そのような過程を経て，カウンセラーは自分の考えや直感やイメージなどを伝え，それをクライエントと共有していく。

Winnicott（1971）は「精神療法とは2つの遊びの領域を，患者の領域と治療者の領域とを，重ね合わせることである」と述べている。カウンセリングの場は二人の中間領域が重なり合う中間地帯であると言うこともできよう。そして兼任カウンセラーのカウンセリングの場合，両者の外的現実，内的現実，中間領域が重なる場と捉えられる。Winnicottの元の概念からは誤用になるかもしれないが，そのような場は中間地帯的性質を帯びる。

Winnicott（1971）「文化的体験が位置づけられる場所は，個人と環境（本来は対象）の間の潜在空間なのである。同様のことが遊ぶことにもいえる。文化的体験は，遊びの中で最初に現われる創造的に生きることに始まる」としている。文化的体験が中間領域での体験であるならば，大学における多くの活動もその領域に関係することになる。授業で行われる芸術活動だけでなく，ある種の講義の場や体験学習（ラボラトリートレーニング）の場も中間領域的な活動と考えられる。すると一般には外的現実と思われているキャンパス内での出来事も実は中間的な営みということになる。事実，授業やキャンパス内の教師と学生の関わり，学生同士の関わりの中には知的，理性的な領域を越えて，心理的・人間的な成長を促すものがある。Rogers（1951）のいう「リアルセルフ（ほんとうの自己，真の自己，ありのままの自己）」は，仮面を被った偽りの自己や他者の期待に沿うことから離れ，いま・ここでの「体験過程」（Gendlin，E.T.，1962）に開かれ，自己存在を肯定する方向に進もうとしている存在といってよいだろう。このような過程はまさに青年期におけるアイデンティティーの確立に必要なものでもあり，キャンパス内の中間地帯（学生相談や中間領域的な学習の場）はこの過程を歩む場として存在しうる。そのような場の中では，学生と教師は創造的に生き，よりリアルで，全体的な関係や存在に近づいていく。すると，カウンセラーやクライエントが学生相談室の戸をくぐることは，それは全く違った世界への参入というより，ある種の中間領域からやや趣を異にする中間領域への移行とみなすこともできよう。学生と兼任カウンセラーは両方の中間領域を生きながら，学生相談室ではより内的色彩を帯びた営みを，外のキャンパスではより外的色彩を帯びた営みをおくる。そして，錯覚と脱錯覚を繰り返しながら，よりリアルで，トータルな人間関係を生み出す過程を生きる。

ただ，この際に注意しなければならないのは二つの中間的領域のずれの問題である。ふたつの中間的領域の間を行き来すること，使い分けることにはある程度の自我の力が必要になる。使い分けは不安と悲しみを伴う。

実際のケースでも，クライエントはある時期には二つの場でのずれに苦しむ。

それはカウンセラーの要因でもあり，クライエントの要因でもある。そのような苦しみはカウンセリングが始まり，心の動揺，混乱が納まってきて，ひとごこちついた時に現われることが多い。カウンセラーはクライエントがそのような痛みに耐えられる自我の強さを持っているのか，モチベーションの高さはどうかをカウンセリング開始時に見極めるとともに，そのような時期が訪れた時に適切なサポートを行う必要がある。その状況を乗り越えることは，学生相談室内外で，よりリアルで，トータルな人間関係を生み出すための第1の試練となる。

上記のような配慮とともに，兼任カウンセラーは教師としての自分とカウンセラーとしての自分との存在の意味の違いを認識しつつ，できるだけ教師とカウンセラーの垣根を低くしておくことが望まれる。それは外的現実，内的現実，中間領域をカウンセラーが抱えているということでもある。そのような存在として，ある程度の安定感をもっていることが，クライエントの支えになり，困難な道を歩む力となる。しかし，上記のカウンセリングの中で，筆者がクライエントに話しているように，それに向かって生きるということであり，その時々の限界を感じつつ，なんとかそれを乗り越えようと努力することである。そのような構えなしでは，いつか教師とカウンセラーとのギャップにカウンセラーもクライエントも耐え切れなくなる。また，人間関係科のスタッフでもある筆者にとっては，それくらいの努力なしでは，授業の中で苦しみや葛藤を持ちながらも，ほんとうの自己に向かう過程を歩んでいる学生に申し訳ない気がする。

Ⅲ．女性のオープンシステム －「共に抱え，共に育む」関係－

学生相談は多くの「はざま」性（菅野，1992）を持っており，人間，仲間，世間，空間，時間をつなぐこと（下山，1987）が重要とされる。そして，そのような観点から様々な試みがなされている。ここで取り上げようとするのは，カウンセラーが意図してネットワークを作ることに関してではなく，女子短大生が自然に作っている対人関係やその際の自我のあり方，そしてそれらを加味したカウンセラーの関わりについてである。

女子短大生の学生相談を始めて驚いたのは，自分が学生相談を受けていることを友人にオープンにしていることが少なくないことである。「これから，○○ちゃん（筆者のあだ名）のところで話してくるね」と友人に告げて学生相談に来たり，学生相談で話したやりとりを，もちろん一部であるが，友人に話したりする学生もいる。友人に対してだけでなく，他の教師に話すこともある（教師に話すことに関しては，ファミリー的な雰囲気を多分に持った小さな短大であることやすべての教師（スタッフ）がすべての学生を抱える人間関係科のあり方の影響もあろうが)。また，カウンセラーが「これは親友にもそう簡

単には話せないだろう」と思われるような出来事や心的外傷を，カウンセラーの予想を越えて，親友と共有することも稀ではない。このようなことにたびたび出くわすと，成人期の男性である筆者は女子短大生の対人関係や自我のあり方と自分のそれらとの違いについて考えざるをえなくなった。

上記のような女子短大生の対人関係や自我のあり方は，筆者には随分とオープンなあり方に感じられる。そのような特性をまだまだ生硬な言葉ではあるが，「女性のオープンシステム」ととりあえず名づけておく。

女性の対人関係は子どものころから，男児のそれとは異なった部分をもつ。思春期になると，その違いはより顕著になる。男子がゆるやかなつながりのグループを形成するのに対して，女子はもっとクローズでタイトなグループを作る。その力は他のグループに対して排他に働くとともに，内に対しては個人のかなりの部分を共有化するプレッシャーを生む。お弁当友達，トイレ友達，おしゃべり，秘密の共有などいつも一緒にいて，話題や考えを共有しようとする。

ある女子学生（Cさん）が授業のレポートに以下のようなことを書いている。

> 女子は小学校，幼稚園のころから“仲良しグループ”という大人数又は2，3人でかたまって行動する傾向が多い。それは中学，高校にいってもみられる。だから，新学期になってクラス替えをする時，私はいつもナーバスになることが多かった。人見知りがはげしかったからです。でも，でおくれたりすると1人になってしまうから，女子の人は大抵必死になっている。私の友人も新学期が近づくとナーバスになったり，時には生理が遅れてしまう子のいるほどです。女性にとって，友達をつくることは，“自分の居場所”を確保するためでもあると思います。自分の居場所を確保して，安心するために友人づくりに執着するのだと思います。

少女の「長電話や長話は井戸端会議の予行演習なのである。情報の交換や連帯性の確認，仲間意識など，女性文化のなかで生きていくために必要なことを覚えていく体験となる」（東山，1990）。友人を作り，連帯性を確認することは思春期の少女にとって，女性の中で「自分の居場所」を確保し，安心感をえるために重要なことであり，それゆえ，大変なストレスをも伴うことであることがわかる。

短大生期は前の期の影響を残しつつ，青年期中期としてのあり方も生まれてくる。友達と一緒にいて，共に行動する，友達の目が気になるという面は残しつつ，自分らしさの探求もより深まる。大人のような行動をとりながらも，自立した自分を確立する途上にいる。男性の自立への旅が基本的には個人の作業であり，同性の友人は一人旅の途中で時々合流する仲間，危機の時の助っ人的なイメージであるのに対して，青年期女子の同性の友人は旅を共にし，時に個人行動をし，お互いがその時経験したことを報告しあい，はげましあうような

関係のようにみえる。そしてそれは東山が指摘するように，成人期への準備でもある。青年期男子の代表的な心理的な問題に「スチューデントアパシー」が，青年期女子のそれに「摂食障害」が挙げられることが多い。アパシーの男子青年が部分的にせよ，強固に社会的関係から遠ざかり引きこもるのに対して，青年期女子の場合，そのような形をとる割合はかなり低い。拒食症では極限的な身体的状況にあるにもかかわらず活動性は高まる。このような差異は自己の問題・課題を表現するチャンネルに性差があることを示唆しているとも考えられる。青年期女子は心理的な状態の悪化しても，アパシー的な社会的関係からの引きこもりという形には出にくく，対人関係の維持に多大な心的エネルギーを費やす場合が多い。近年は女子の不登校や引きこもりも増加しているが，不登校が報告されるようになった当初は圧倒的に男子が多かった。また、成田（1994）は強迫症の男女の比較において、男性は不安を自己の内界に保持し続け、一人で悩む「自己完結型」が多いのに対して、女性は不安解消のために他者を巻き込みしがみつく「巻き込み型」が多いことを指摘している。そしてその差異に関して、ガットマン（1965）の、女性の自己と他人、対象と対象に関係する情動の間の境界のあいまいさについての考察を紹介しつつ、女性に特徴的な自我様式の反映とみることもできるとしている。上記の差異は自我や関係性のあり方において、男女で異なる部分があることを示唆していると思われる。一般的な対人関係においても，心理的な問題の面からみても，青年期女子はオープンなネットワーク（オープンシステム）の中に存在していたり，存在することに多くの心的エネルギーを使っている場合が多いと言えよう。

青年期女子のオープンなネットワーク（オープンシステム）を描写すると，図1のようなイメージとなる。A，B，Cはそれぞれ一人の人を，実線や点線はそれぞれの境界のありようを示している。

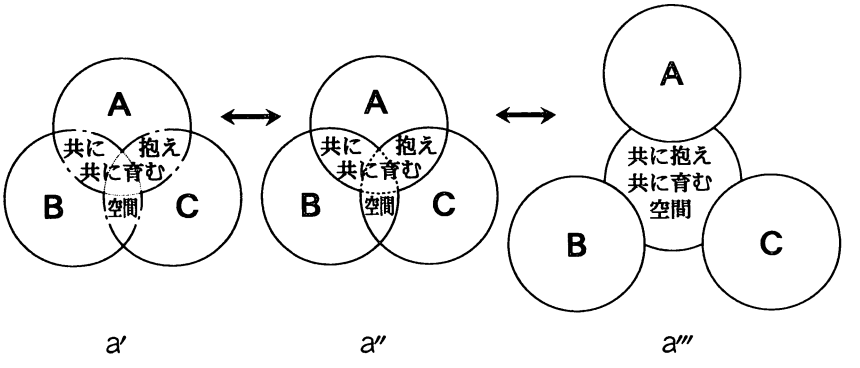

図1「共に抱え、共に育む」関係

上記のモデルは以下のように考えられる。a′，a″，a‴ではそれぞれの重な

りや境界のありようが異なる。それは心理的発達の段階，関係のあり方，状況に影響を受ける。a′はお互いが重なりあい，「共に抱え，共に育む空間」を構成し，お互いが影響を大きくおよぼしあう。時にその影響は自我を非常に揺さぶり，同一視的な状況が起こる。a″はそれぞれの個人が自立しつつも，密接な関係を結び，「共に抱え，共に育む空間」を構成する。a′は両者の中間的フェイズである。これらのあり方は個人の心理的発達段階においてかなり固定的ではあるが，関係や状況にも影響を受け，他のフェイズに移行しうる。

このようなオープンなシステムの中で，女性はお互いの秘密や傷を共に抱える。そして，お互いの可能性を共に育んでいく。河合（1987）は「秘密の扱いというものは，なかなか厄介である。それをいつまでも自分だけでもっていたいという気持と，誰かと共有したいという気持との相克の間に存在している。このことは，取りも直さず，アイデンティティーというものが，あくまで自分だけに固有のものでありつつ，他の人々とのつながりの中に存在しなければならぬというパラドックスをもつことと相応するものである」と述べている。オープンなシステムは「共に抱え，共に育む」システムなのであろう。『赤毛のアン』のアンとダイアナとの関係において，相手はなくてはならない存在であった。特にアンにとって，ダイアナは自分の想像や秘密を抱えていくために，不可欠な存在である。お互いがお互いの秘密や傷を，あたかも自分のことであるがごとく抱え合うことでふたりはお互いを癒し合う。そして，お互いの可能性を育んでいく。もし，ダイアナがいなかったらアンはどうなっていただろうか。彼女の創造的な個性をアン自身がもてあましたり，抱えきれず混乱に陥ることはなかっただろうか。

このような対人関係や自我のあり方は少女期だけに限定されるものではない。発達にしたがって，趣は変わるものの，女性の心の底流に流れている。子育てを母親一人で行うのはかなりの困難がともなう。マンガ『ママポヨ』にあるような主婦どうしのつきあいは子育てには必要なネットワークである。公園デビューは子どものデビューでもあるが，母親にとっても，それまでに築かれていた母親達のネットワークへの加入儀礼なのである。その中でお互いの子ども達と自分達を抱え合う。また，Winnicott（1965）がいう「母親の原初的没頭（とらわれ）」のような同一化の能力は生得的な面も多分にあろうが，母娘関係の中で「絶対依存」→「相対的依存」→「独立への方向」（Winnicott，1965）を経て，子ども時代から成人期に至る友人間の「共に抱え，共に育む」システムの中で育まれるのかもしれない。しかし，図1のa′のような状況では同一化の能力は裏腹に，「友達どうしで死について話し合い，同調してあっているうちにヒステリー症状をおこし，自他境界が未分化な一体感にやられてしまい，手をつないで入水したり，ビルから飛び降りてしまう」（東山，1990）といったアクティングアウトの危険性をもはらむ。

以前は少女が大人になる過程を支えるシステムがあった。成女式は初潮とと

もに始まり，第一子の出産で完成した。少女たちは月経宿で年輩の女性たちから糸紡ぎの仕事を覚えさせられた。糸紡ぎには，命を紡ぐ，生と死のくり返しなどの象徴がある。また，性と豊穣の秘儀や部族の習慣を教えられたり，宗教的伝承が教えられた（東山，1990)。しかし，現在では，価値観の多様化や核家族化や地域コミュニティの崩壊にともない，女性が女性を守り，育んでいく社会的システムまでもが解体してしまったようにみえる。確かに，女性サポートセンターの開設，子育てのネットワーク作り，アダルトチルドレンなどのセルフヘルプグループ，子どもの虐待ホットライン，結婚しても女性が実家で親と同居する「マスオさん」的家族，里帰り出産，母が不登校の娘と一緒にコンサートにいったり，買い物をしたりする女性性の育て直しなど，なくなってしまったものを補完しようとする試みはなされている。

しかし，それらの試みも社会全体からみると，残念ながらまだまだ以前の女性が女性を守り，育んでいく教育－サポートシステムを充分に補完しているとはいえない。男女の間で，家庭の問題で，女性同士のオープンシステムの狭間で，サポートを受けられず苦しんでいる女性たちがいる。また，山下（1990）が指摘するように，男性社会である現在を生きる困難さは圧倒的に女性に重くのしかかる。女性の人生のわかれ道での選択には犠牲や覚悟や勇気や信念が要求される。

ある学生（Dさん）のレポートを挙げる。

（私は）何かに依存するのが嫌で，何かと依存しそうな人間関係を突然切ってしまったり，目的に合わせて友人をつくったりもした。（中略）勘違いしていたことがあった。依存というのは，人間として間違った行為だと思っていた。買い物や食べ物，仕事，アルコールといった場合はまた，話がちがうが，心の支え程度の依存は必要なんだということである。今の私にはそのような物は，心の内には存在しない。今までは彼氏という存在にそれを求めていたと思う。でも，心の支えというのは，自分の内に求めるもののように思う。だから，もう少し自分の内をみつめてみようと思う。

青年期は自己確立を模索するときである。それは自立と依存を自分のなかでどう位置づけていくかの問題でもある。依存を拒否して生きていくことは厳しい道を一人で歩むことと似ている。かと言って，彼や親に頼っているばかりでは自立はなされない。上記の学生のように「心の支えは，自分の内に求め」，築くものである。そのためには女性の場合，女性どうしでの「共に抱え，共に育む」関係があると，それはなされやすい。しかし，すべての女性がその恩恵にあずかっているわけではない。外的現実，内的現実，中間領域が交差する学生相談室が自由で保護された空間となり，クライエントの外的現実，内的現実，

中間領域を豊かにしていければ，その存在は価値あるものになる。

アンには幸いダイアナがいた。しかし，学生相談室で出会う現在のアン達はダイアナをもっていないがために，面接室にやってこざるをえない。「おとなの世界の影をみてしまったとか，いまだに両親に愛されることにエネルギーをとられている少女」（東山，1990），親友だと思っていた人に裏切られ，深く傷つき，女どうしのつきあいを信用できなくなった女性，オープンにはできない秘密をかかえてしまった女性，自己そして他者の女性性を拒否して生きている女性，男性的な感覚をもった女性，自主独立の精神をもった女性は女どうしのオープンシステムの中に容易には入れない，入らない。オープンシステムがそのような女性達にとっては毒をもつものであったり，価値を見出せないものであったり，独立を妨げるものに感じられるからである。ただ，このような女性達の中には「相依的」関係を持たず，「幼い者や弱い立場にある者を育み，癒す，人や自然やさまざまなシステムなど母的な存在」（渡辺，1993），「希望としての母」（東山，1993）の守りが薄い人もいる。秘密を共有し，傷を癒しあう関係を持たないため，さらに傷を重ねることもある。

学生相談の場は，自由で保護された中間的な場である。そこに，外界を持ち込むこともできるし，外界から距離をとることもできる。前に女性は男性に比べ，引きこもることが少ないと書いたが，確かに女性にとって引き篭りが必要な場合がある。それは，女性が変容を必要としている時である。しかし，一人で引き篭ることは厳しい。引き篭りを共にしてくれる同性がいるとその厳しさは緩み，豊饒さを増す。学生相談室のカウンセラーは外界からの引き篭りを保証し，それが変容へとつながる場を提供する者である。特に，女性カウンセラーの場合，以前の成女式の年輩女性のように，引き篭りを共に過ごす存在になることができる。東山（1993）の報告や倉戸（1996）のケースでは女性クライエントの引き篭りをサポートする女性カウンセラーならではの感覚や関わりが見られる。男性である筆者にはとてもまねできない感がある。

困難や限界を感じつつも，男性カウンセラーとしての筆者が，日々のカウンセリングの中でできることは，女性のオープンシステムでの喜びや苦悩や揺らぎをクライエント自身が抱えられるよう，侵入的にならず，慎重に関わっていくことだと考える。上記の学生（Cさん）のレポートにもあるように，女性は女性のオープンシステム内の「自分の居場所」作りに多大のエネルギーを費やす。それは「自分の居場所」が見つかることで，安定し，「共に抱え，共に育む」関係が生まれるためであろう。そのようなオープンシステムが持つ肯定的側面を知りつつ，オープンシステムとの間で問題をかかえているクライエントに対しては，その問題がどこにあるのかをクライエントとともに探っていく必要がある。

オープンシステムでの対人関係のとりかたを改善すればよいことなのか，もっ

と深い問題の解決なしにはオープンシステムに戻れないのか，彼女の個性を生かすならば，今のオープンシステムを飛び出し，新天地を探すことが必要なのかなど，オープンシステムとの関連で，自分の生き方の様々な道をクライエントと共に探していくことが重要となろう。自我レベルが高く，現実の対人関係への適応，改善が問題の中心になっている場合には，クライエントと共に，対人関係における問題点，不適応の原因，違和感の理由など現実に近い部分で何が起こっているのかを明確にし，現実の対人関係のありかたを試行錯誤の中で改善していくことができる。人格上の問題や生育暦上の問題が根深かったり，大きな傷，秘密を抱えている場合などは，その問題の解決なしには現実の対人関係改善を行なうことは難しい。このような場合，女性同士の「共に抱え，共に育む」関係を持っていない場合も少なくない。中には危機的状況に曝される事を通して，対人関係に関する今までの不安，恐怖を乗り越え，「共に抱え，共に育む」関係を作り出せる場合もあるが，一般的にはなかなかその不安，恐怖から逃れられず悪循環を繰り返す場合が多い。このような時にカウンセラーが学生同士のネットワーク作りに関与することで，抱える環境を整えていく場合もあるが，他学生の負担など考慮すべき点も多い。抱える環境が育っていくのに時間がかかる場合，カウンセラーはクライエントがその状況の中で「生き残る」(Winnicott,1971) ことに力を注ぎつつ，クライエントの内的問題に取り組むことになる。そして，クライエントがオープンシステムに戻っていったり，新たに創造する時が満ちるのを待つ。男性的な感覚をもった女性や自主独立の精神をもった女性の場合，いわゆる女性的なつきあいに違和感を持つことがある。このような女性も女性のオープンシステムにうまく適応できない場合がある。上記の学生（Dさん）の記述にもあるように，このような女性の場合，男性が彼女のよき理解者となる場合が多いが，男性の支えだけでは充分でないこともあるように思う。彼女達の個性を削がず，育てていくことに，カウンセラーとしては注意しなければならない。今，苦労して所属している，入ろうとしている対人関係がはたして彼女に適しているのか明確にしていく必要がある。自分の感覚，考えを分かってくれる女性が見つかれば，彼女の問題は雲散霧消し，個性を育てあえることも少なくない。新たなオープンシステムを探し，そのような人が見つかり，女性同士の「共に抱え，共に育てる」関係を作りあげるまで，カウンセラーが彼女の理解者として支えていくことが肝要になる。

Ⅳ．おわりに

本稿では，「日常と非日常の重なり」，「(錯覚⇔脱錯覚) ⇒よりリアルで，トータルな人間関係」，「女性のオープンシステム」，「共に抱え，共に育む」関係を中心に，女子短期大学の学生相談における兼任カウンセラーの工夫と留意点を

考察した。まだまだ試論の域を出ず，論として練り足らないものばかりであるが，日頃の学生相談の中で筆者の心をよぎる思いや大切にしていることである。学生達のほんとうの自己への道を微力ながらもサポートできるよう，学生相談のカウンセラー，短大のスタッフとして，そのために必要なことや工夫を探し，創造できればと思う。

引用および参考文献

上里一郎，大河内浩人，児玉憲一，田嶌誠一，藤土圭三，松原秀樹（1992）：座談会／大学生のカウンセリングをめぐって．現代のエスプリ.294．至文堂.

青沼貴子（1995）：ママはぽよぽよザウルスがお好き みたび．婦人生活社.

Gedo, J. E. and Goldberg, A.（1973）: MODELS OF THE MIND －A Psychoanalytic Theory (2nd Edition). University of Chicago Press. Illinois. 前田重治訳（1982）：精神分析理解のために 心の階層モデル．誠信書房.

Gendlin, E. T.（1962）: Experiencing and the Creation of Meaning. New York : Free Press of Glencoe, Macmillan. 筒井健雄訳（1993）：体験過程と意味の創造．ぶっく東京.

Gutmann, D. L.（1965）: Women and the conception of ego strength. Merrill－Palmer Quarterly, 11 ; 229-240.

Harding, M.E.（1971）: WOMANS MYSTERIES : Ancient and Modern. 樋口和彦，武田憲道訳（1985）：女性の神秘 －月の神話と女性原理－．創元社.

東山弘子，渡邊寛（1993）：「母」をなくした日本人 －希望としての「母」の発見．春秋社.

東山弘子（1990）：青年期女子のイニシエーション．氏原寛，東山弘子，岡田康信共編．現代青年心理学 －男の立場と女の状況－．培風館.

Kallf, D. M.（1966）: SANDSPIEL －Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche. 河合隼雄監修，大原貢，山中康裕共訳（1972）：カルフ箱庭療法．誠信書房.

河合隼雄（1987）：こどもの宇宙．岩波新書.

菅野信夫（1992）：学生相談をめぐる「はざま」性．全国学生相談研究会議編集．現代学生へのアプローチ．キャンパス・カウンセリングシリーズII．現代のエスプリ.294．至文堂.

北山修（1985）：錯覚と脱錯覚 －ウィニコットの臨床感覚－．岩崎学術出版社.

倉戸由紀子（1996）：学生相談における兼任カウンセラーの役割について －引きこもりとacting outを繰り返した事例から－．学生相談研究.17（1）.

楠本和彦（1997）：スクールカウンセラーがはたす役割，機能についての一考察．南山短期大学紀要.24.

楠本和彦（1999）：小規模女子短期大学における兼任カウンセラーの学生相談の特徴と限界に関する一考察　－本学における学生相談の自己点検を兼ねて－．南山短期大学人間関係研究センター紀要人間関係．16.

前田重治（1985）：図説臨床精神分析．誠信書房.

成田善弘（1994）：強迫症の臨床研究．金剛出版.

鳴澤實（1986）：学生・生徒相談入門　－学校カウンセラーの手引とその実際．川島書店.

Rogers, C. R.（1951）: Client-centered Therapy　—Its Practice, Implication, and Therapy. 友田不二男編訳（1966）：サイコセラピィ．ロージャズ全集．3．岩崎学術出版社.

Rogers, C. R.（1980）: A WAY OF BEING. Houghton Mifflin Company. 畠瀬直子監訳（1984）：人間尊重の心理学　－わが人生と思想を語る．創元社.

ロージャズ全集．8．パーソナリティ理論．（1967）：伊東博編訳．岩崎学術出版社.

ロージャズ全集．11．カウンセリングの立場．（1967）：友田不二男編訳．岩崎学術出版社.

ロージャズ全集．12．人間論．（1966）：村山正治編訳．岩崎学術出版社.

下山晴彦（1987）：学生相談における新たな心理臨床モデルの提案　－関係性の理念に基づく．「つなぎ」モデル－．東京大学学生相談所紀要．5．

下山晴彦，峰松修，保坂亨，松原達哉，林昭仁，齋藤憲司（1991）：学生相談における心理臨床モデルの研究．心理臨床学研究．9（1），55－69.

Winnicott, D. W.（1965）: The Maturational Processes and the Facilitating Environment. 牛島定信訳（1977）：情緒発達の精神分析理論．岩崎学術出版社.

Winnicott, D. W.（1971）: Playing and Reality. 橋本雅雄訳（1979）：遊ぶことと現実．岩崎学術出版社.

山下景子（1990）：おんなのわかれ道．氏原寛・東山弘子・岡田康伸共編．現代青年心理学　－男の立場と女の状況－．培風館.

全国学生相談研究会議編集（1991）：キャンパス・カウンセリング．キャンパス・カウンセリングシリーズⅠ．現代のエスプリ.293．至文堂.

全国学生相談研究会議編集（1992）：現代学生へのアプローチ．キャンパス・カウンセリングシリーズⅡ．現代のエスプリ.294．至文堂.

全国学生相談研究会議編集（1992）：発達カウンセリング．キャンパス・カウンセリングシリーズⅢ．現代のエスプリ.295．至文堂.

全国学生相談研究会議編集（1991）：キャンパスでの心理臨床．キャンパス・カウンセリングシリーズⅣ．現代のエスプリ.296．至文堂.